

文房四宝を知ろう

筆、墨、硯、紙は文房四宝と呼ばれ、書を学ぶ者にとって特に大切だと考えられてきました。用具・用材に対する理解を深めることで、日々の臨書と創作の成果も高まります。

筆

「文房四宝のなかで最も重視するのが筆。武士にとつての刀のようなもの」と柿沼さんは言います。筆は穂の長さや太さ、使用される毛（主に獣毛）の種類などによりさまざまです。書き手は、書く文字の線質や大きさによって、筆を

使い分けることがあります。

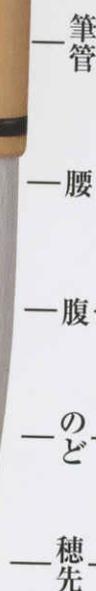
初心者が最初に持つのであれば中鋒兼毛のものが扱いやすいでしょう。広島県の熊野筆や奈良県の奈良筆は国産品として広く知られており、日本製の筆を和筆、中国製のものを唐筆と呼びます。中

毛の性質

毛の性質により、書く文字の線質は変わる。上はイタチ、下は山羊の毛を使った筆。



穂の長さ
と各部の名称



短鋒

中鋒

長鋒

筆の呼び方は穂の直径と長さに対する比率によって変わる。写真上の穂はいずれも羊と馬の兼毛。右の筆を長鋒兼毛と呼ぶ。筆管に号数（筆管の直径の規格）が印字されているものがあり、半紙に1~2文字程度の文字を書くのであれば3号のものが、4~6文字ならば4号のものが適している。



柿沼さんが大作に使用する19連根の超大筆。着脱式になっており、長い穂を19本連ねる。柄も組み立てて使う。墨を付けていない状態でも約40kgの重量がある。

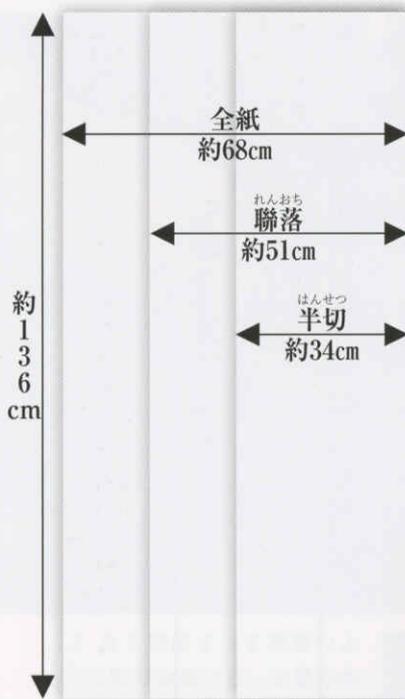


柿沼さんの筆ラック。仕事部屋の一角に、筆の一部が使い勝手よく収納されている。奥に並んでいるのが超大筆用の穂。

柿沼康二の

つぶやき

「用具・用材への費用を惜しむことは、書の上達を惜しむことだ」と教えてくれたのは書家の父・柿沼翠流でした。皆さんにもできる限り良品を選んでほしいと思います。良品ならば、ヤル気も出る！途中で投げ出さなくなる！



使用サイズ
(裁断サイズ)による
紙の規格と呼称
※半紙は約35×25cm。

紙

創作には手すきの紙が使われることが多いものです。唐紙（本画仙など）と和紙（和画仙など）がありますが、それぞれ原料や製法が異なります。にじみの出やすさやかすれやすさなどは銘柄によって異なり、本格的に創作に力を入れるのであれば、自分の表現に合う紙を見つけることも重要です。使う紙の規格（大きさ）によって呼称が変わることも知っておきましょう。

練習用としては機械ですいた紙でも十分でしょう。



柿沼さん愛用の通称・緑端溪。硯面を指でなぞると部分的に質感が違うのがわかる。「手で墨をすると、墨の粒子の大きさが変わっていい墨色が出ます。墨をすっているときのすり心地の良さが、臨書にも良い影響を与えてくれます」(柿沼さん)。

墨

和墨（日本製）と唐墨（中国製）がありますが、いずれも原料となる煤（すす）や香料を混ぜて練り固めたものが一般的です。書きたい線の色合いによって、和墨と唐墨を使い分けることがあります。

液体タイプの墨汁などもありますが、柿沼さんは固形のものの手でする昔ながらの手法をお勧めしています。



唐墨には装飾の施されたものが多数ある。観賞用にコレクションする人もいるほどだ。



和墨(上)と唐墨(下)の例。

硯

墨をすったり、毛先を整えたりする面を墨堂（陸）^{おか}といいますが、硯面には鋒錠^{ほうじょう}という細かな凹凸があり、石質が密で墨がよく伸びるものが良硯とされています。

唐硯^{とうげん}（中国製）では端溪硯^{たんけいげん}や歙州硯^{せきしゅうげん}、比較的安価な羅紋硯^{らもんげん}などが有名ですが、和硯（日本製）では山口県の赤間硯^{あかま}や山梨県の雨畑硯^{あまはた}などが知られています。

端溪硯。



書く準備

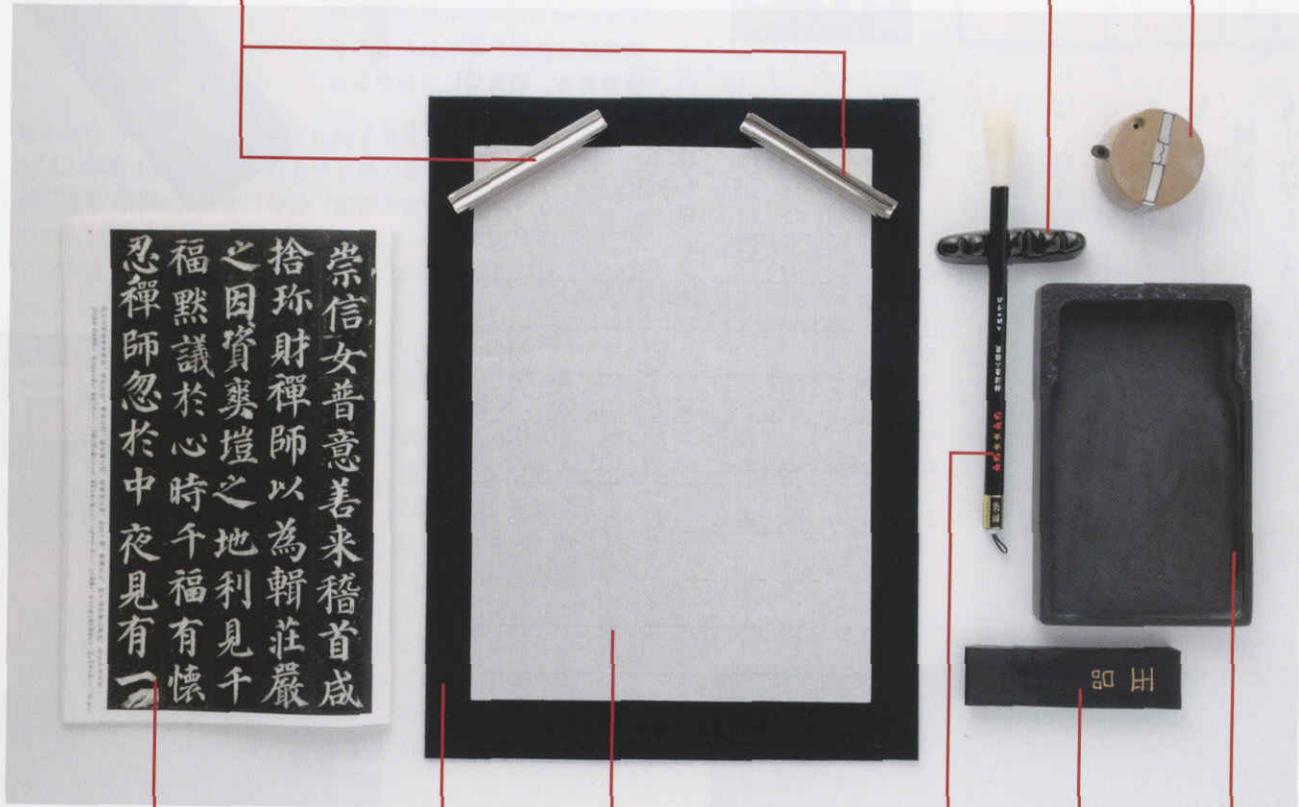
文房四宝とともに、
必要な用具・用材をそろえましょう。
ここに登場するものは一例ですが、
良い筆、良い道具であるほど、
書きたい気持ちが高まるはずです。

水入れ
固形墨をするのに使う。

筆置き
硯の外側に置いてもいい。

文鎮

ここでは2つセットのものを
用意した。紙と文字の位置に、より
気を配りながら書くことができる。



硯
端溪硯。

墨
和墨。

筆
中鋒兼毛のもの。

半紙
練習用のもの。

下敷き
半紙を置くためのもの。
厚さは2〜3mmほど。

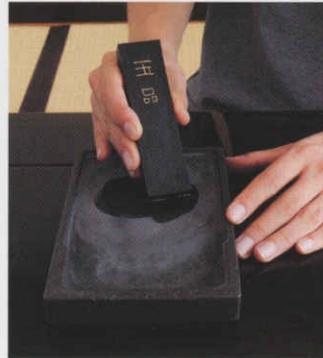
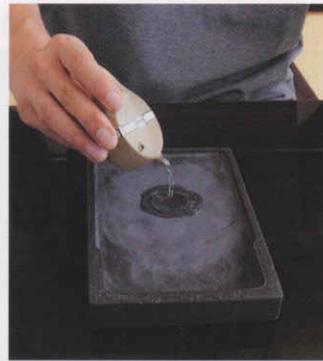
お手本
できるだけ近くに置き、
すぐに見られるようにする。

書くことは心静かに 墨をすることから



3 ある程度すって写真のような粘りが出たら、少量の水を加えて再びする。すった墨は徐々に墨池へと押し流す。途中で墨池の墨と混ぜるようにしながら必要量になるまで繰り返し行う。

4 十分にすれたら、墨堂上の墨を丁寧に墨池へ押し流し、できるだけ墨が残らないようにする。



1 少量の水を墨堂にたらす。
2 軽く押す程度の力で、だ円を描くようにしてする。使い始めの墨は少し寝かせて角からするとすりやすい。

すり終わった直後のケア

硯面に薄く残った墨は内部の膠にかわが短時間で凝固しやすくなる。ふとした拍子に、この固まりを動かすと硯面をはがしてしまうことがある。数時間書き続けるときは、すり終わりに濡れた布などで墨堂を拭き取っておくとよい。使用後の墨もひび割れ防止のために、すり口に付いている墨を拭き取る。



初めて使う硯は墨をする前に硯用の砥石で研ぐ



墨堂に少量の水をたらして、砥石の平らな面で円を描くように研ぐ。軽く押す程度で行う。砥石の泥が水に混ざってきたら、新たに水を加えて硯面全体（墨池も含む）を研ぐ。研ぎ終わったら、水洗いして乾かす。墨がすりにくく感じたら、そのつど行おう。



硯用の砥石。

硯ですった墨は、粒子が一定ではないため、紙への浸透も画一的ではなくなると考えられます。それが「より立体的な書線」を書くためのポイントの一つ」と柿沼さんは語ります。ゆえに手ずりは欠かせないのです。

しかし趣味の練習の際は、十分に墨をする時間がとれないことも

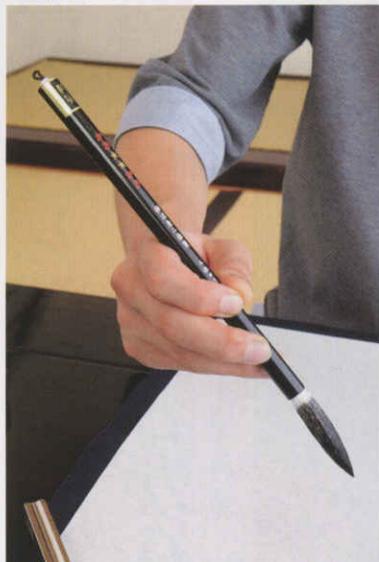
あります。そのようなときは必要な量をすべてすらずに、少量の墨汁を混ぜて使ってもいいでしょう。墨が濃いと感じたら、水を加えて調整してください。

使用後の硯は、十分に水で洗い、乾かします。時折、硯用の砥石で研ぎましょう。

筆の持ち方

筆の持ち方には主に単鉤法たんこうほうと双鉤法すうこうほうがあります。単鉤法は筆の軸に人さし指をかける持ち方で、双鉤法は人さし指と中指をかける持ち方。どちらで持ってもいいですが、「より繊細な筆運びが可能」という考えから、柿沼さんは単鉤法を推奨しています。

双鉤法(正面)



単鉤法(正面)

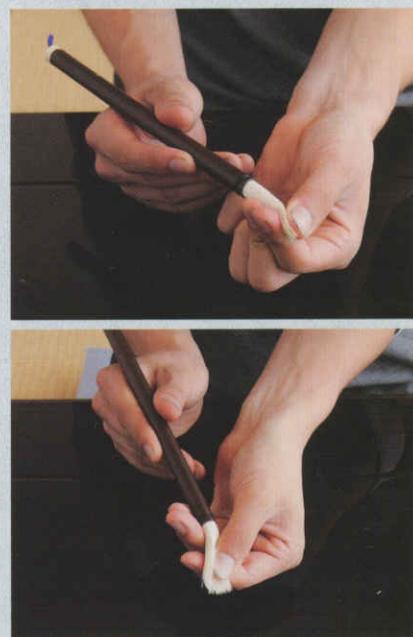


単鉤法(側面)



手のひらは卵1個分が入るくらいゆったりとあける。このゆったりとした持ち方がポイント。柔軟な筆運びが可能になる。

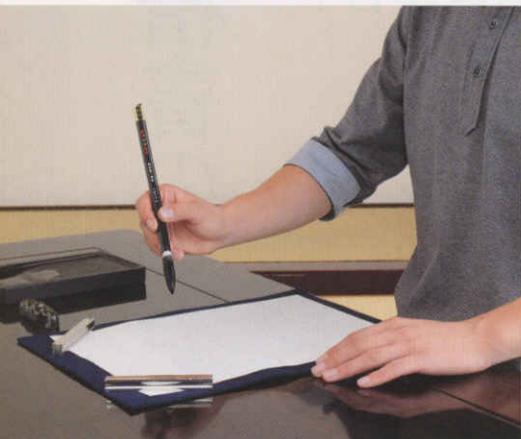
固め筆のおろし方



穂にのりのついた固め筆の場合は先端から人さし指と親指で挟むようにしてほぐす。穂の腹の部分まで十分にほぐそう。

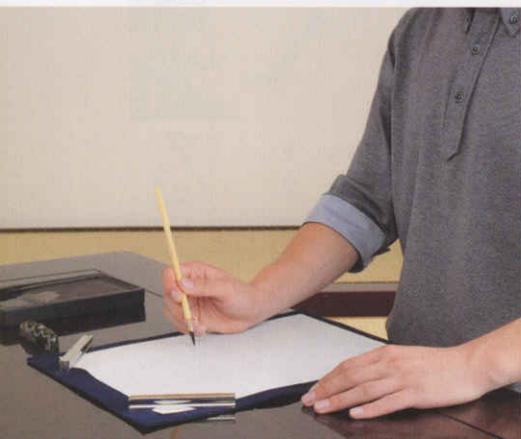
腕の構え方と姿勢

懸腕法(側面)



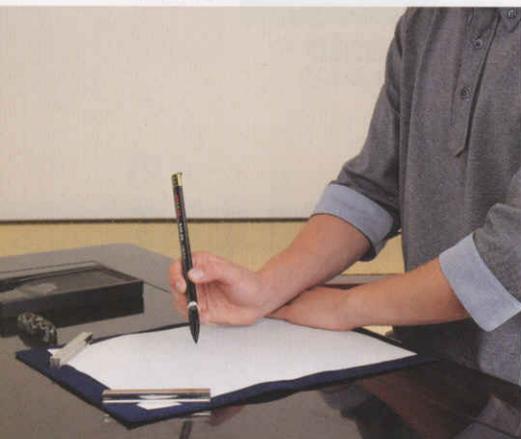
腕を机から浮かせて書く方法。半紙に1~2文字入程度の大きさの字を書くならば懸腕法が適している。

提腕法(側面)



机に腕をつけ、手首を上げて書く方法。小筆で小さな字を書くのに適している。

枕腕法(側面)



筆を持っていない方の手を枕のようにして書く方法。

懸腕法(正面)



正座したときの基本姿勢。背筋は伸ばす。机の高さは、机の上面とへそのあたりが水平であることが理想。

座り方は、長時間書くにあたり、書きやすい方法をとりましょう。ここでは正座で書く場合の姿勢を紹介しています。腕の構え方には懸腕法、提腕法、枕腕法などがあります。大きな文字を書くときには懸腕法が適していますが、こちらも書きやすい方法をとります。柿沼さんは、枕腕法のように左手で紙を押さえ、右腕を左手からわずかに浮かせて書きます。

安定した座り方



厚手のタオルを丸めて、脚の間に挟んで腰を下ろすと、安定感が増す。正座の疲れ防止になり、集中力もアップする。